

二〇二五年一月一日

達筆の手描き歌留多や緋毛氈
大幹の洞に嵩なす落葉かな
着膨れて地震の日のまた偲ぶるる
寒雀陽の枝うつり遊びけり
蟬梅の香に癒やさるる至福かな

二〇二五年一月九日

白息のとびかふ工事現場かな
霜の朝湯煙の洩る堆肥小屋
ヘルパーさん来て老い母の初湯かな

二〇二五年一月八日

宅急便受け取る御慶交はしつ
夫の分まで生きなんと七日粥

二〇二五年一月七日

句仲間の自選句集を読初に
淑気満つ大切岸の磨崖仏
七草に雑穀も入れ健祈る
富士高嶺さしせめぎあふ風
新聞のかため読みして女正月
根ごと炊く七種粥の野の香かな

二〇二五年一月六日

ネクタイの苦しき仕事始めかな
参道の木漏れ日つつく寒雀

二〇二五年一月五日

目瞑りて思考す棋士の懐手
昨夜の河豚鏡のごとく煮凝れり

二〇二五年一月四日

しなやかに命毛はしる筆始め
子ら去にて一人語りの四日かな

毎日句会みのる選・二〇二五年一月二三日

むべ

ぼんこ

うつぎ

もとこ

よし女

康子

千鶴

あひる

やよい

よし女

うつき

愛正

よし女

康子

うつき

むべ

わたる

澄子

澄子

澄子

うつき

ほたる

なつき